

大地震追悼の一日に

17日 読経行道や慰霊法要

神戸市仏連・全日仏青

神戸市仏教連合会（廣瀬照晴会長、四百八十二寺）は既報（三日付28面）の通り、全日本仏教青年会（略称＝全日仏青、水谷栄寛理事長）と共催して、六千三百余人の犠牲者を出した兵庫県南部地震から一周年忌を迎える十七日、「阪神・淡路大震災一周忌／全国仏教徒慰霊行脚／神戸結集」の追悼供養を執り行なう。

この日は一周忌法要の呼びかけに応じた全国の仏教各宗派の僧侶ら四百人、仏教系ボランティア団体、各団体、一般市民ら総勢五百人が被災地の神戸に集まり、区ごとに七班に分散。地震発生時刻の午前五時四十六分に合わせて市内全寺院で打ち鳴らされる梵鐘の音を合図に、東灘区・西福寺、灘区・理性院、中央区・西方寺、兵庫区・福海寺、長田区A・感応寺、同B・明泉寺、須磨区・須磨寺を出発、「読経行道」のかたちで約三時間半にわたって被災地域を「慰霊行脚」する。行脚したあと午前十時三十分、兵庫区の時宗・真光寺（松原通一ノノ六二）に集結、合同の慰霊法要を厳修して神戸結集を終了する。

慰霊法要は、導師・廣瀬照晴神戸市仏教連合会会長、脇導師・水谷栄寛全日仏青理事長、明石和成社団法人神戸青年仏教徒会理事長のもとに参加団体の役員らが出仕して営まれる。導師の表白文、読経（般若心経・重誓偈・自我偈）のうちに参加者全員で焼香する。

法要後、全日仏青では今回の神戸結集を踏まえて、今後の救援活動のための全国ネットワークを作ろうと宣言文を発表する。

合同法要のあとも全日仏青では、全真言宗青年連盟と共催で神戸市ひよどり越墓園（無縁墓地）で慰霊法要を営み、午後一時からは全国曹洞宗青年会との共催で長田区御蔵菅原地区で慰霊法要を営修する。さらに同五時から、全真言宗青年連盟と共催で須磨区の真言宗須磨寺派大本山須磨寺において慰霊法要を行ない、うどん、おでんの“接待”をすることになっている。

燃え上がる神戸市長田区久保町六丁目（昨年1月17日午後2時）【写真は省略】

展望'96年

春には本山で糾弾会

一方、経常宗務上の課題は、やはり今年も基幹運動。ここ二年間に連続して発生した三件の差別事件に対し、昨年末から部落解放同盟による点検糾弾会が、三十一の全教区を対象に実施されている。この点検糾弾会が終了した後にはいよいよ本山で糾弾会が今年春頃に開かれる予定で、今年はこうした糾弾の場を通じ、これまでの宗門の差別解消に向けての取り組みの真価が問われていく。

これまでも基幹運動については、差別事件の事後対応に終始するだけの取り組みや理論学習の域を出ない研修のあり方などへの批判が強く、運動の抜本的な改革の必要性が指摘されてきた。

昨年十一月には大阪市西成区の日本最大と言われる同和地区で、大谷光真門主をはじめ松村総長以下の本山の全幹部職員が現場学習会を実施、観念論の域を脱し現場主義に基づく差別解消への取り組みに積極的な姿勢を示した。

この学習会は、相次ぐ差別事件に揺らぐ同朋教団への信頼に深い憂慮の念を感じているとされる光真門主自らの提案に基づくものであるが、その一方で各教区での点検糾弾会では、糾弾会への参加を一種の“アリバイ作り”と捉えている僧侶もいることが指摘されている。

このような“温度差”が基幹運動を推進していく上でのネックとなっているのであるが、運動の方法論、理念の双方での均一化には「ファシズム的」との警戒も強く、こうした点についての整合性を図りつつ運動の改革を進めていくことが今後の課題だ。

この他にも懸案事項は山積しているが、中でも急を要するのは兵庫県南部地震で被災した兵庫教区等の被災寺院の復興の問題。

同教区では、昨年十一月末に宗派当局に対して請願書を提出。門信徒も多くが被災し自力での復興が不可能な被災寺院の支援のため、災害対策金庫の融資額の拡大と返済期間の延長、そして、助成金の支出等を要望をした。

これまで、松村総長は、災対金庫の原資（十五億円）の増額を対策の第一とし、各教区等から要望が強い総合計画の予算の一部を復興支援に流用するようにとの要望には難色を示し続けている。

しかし、昨年末、兵庫教区を訪れた同総長は「宗派としても対応を考えている」と、より積極的な復興支援策の発動を示唆したもようで、教区関係者は今後の対応に期待を寄せている。